
片翼の勇者と非道のカルマ

サラシナショウマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片翼の勇者と非道のカルマ

【Nコード】

N1451BA

【作者名】

サラシナシヨウマ

【あらすじ】

「私の仲間になれば、世界の半分を渡そう……どうかね？」
「戯言を……」

黒髪の勇者はふと、そんな懐かしい問答を思い出した。魔王を倒す事に、人を救う事だけに人生をささげていたあの頃の事を。あの時の自分は、純粹だったのだらう。何よりも先に正義を考え、そのための最善の行動を行った。だから、だからこそ、勇者は裏切られた。

勇者は考える。いつたいてどこで狂ったのかと、それとも最初から

狂っていたのかと。立ち向かうために駆けるのではなく、逃げる
為だけに駆け続ける勇者を、人は“魔王”と呼んでいた。

魔王を倒した勇者のその後と、勇者を信じぬく少女を描く、冒険
ファンタジー小説。

【1】プロローグ - ?

煩わしいほどに鋭く響いたのは、天を割る雷の声。僕はそれに意識を奪われぬように、羽の様に軽い剣を構えた。

僕の瞳に映るのは下卑た笑みを浮かべながら紅の角を煌めかせる一人の魔族。センスの悪い漆黒の台座に座り、一般人なら腰を抜かすほどの威圧感を放っている。

その魔族がいやらしい程に口元をゆがませながら僕に問うた。

「私と手を組めば、世界の半分をお前に渡すが……どうかね？ 勇者？」

勇者。

そう呼ばれた僕は、少しだけ思いを巡らせた。その言葉の意味について。

人間の手ではどうしようもできない事が起こった時、天が遣わす使者。それが勇者と呼ばれる僕の正体だ。

背に両の翼を持って生まれた僕は、生まれながらにして勇者という人生を歩むことを決定づけていた。それに文句や疑問があったわけではない、むしろ喜びすら覚えていた。

人の役に立てる事がうれしかった。

例えば母親が子供に無償の愛を与えるように、僕も人々に救いを与えられることが何よりもうれしかった。

その為に剣をふるった。

湧き上がる胃液を無理やり飲み込み、真っ赤に咲く魔物の血をふるい払った。

ただそのすべては人間の為に。僕たちの為だけに。

目の前の魔王を、殺すために。

「戯言を」

思考を辞めると同時に、言葉を紡いだ。

そしてもう一度、僕は答えが見えている問答を断ち切るために言葉を並べ立てる。

「無論、断る。貴様が今までやってきた極悪非道の数々……。よもや忘れたとは言わせんぞ、魔王」

「ククツ、君ならそう言うと思ったよ。とりあえず尋ねてみただけだ、セオリー通りにね。少しは魔王を目の前にしているという気分、味わってもらえたかな？」

「……いい加減その下衆な口を閉じろ、直ぐ楽にしてやる」
限界だった。

目の前で優雅に笑う同胞を次々と殺していった魔王に対する殺意を抑える事が、僕にはもうできなかった。無意識の内に剣を握る手に力が入る。いや、それだけじゃない。足に、腕に、目に鼻に口に、そのすべてをただ魔王と言う存在を世から消すためだけに向け、僕は叫んだ。

「……魔王、貴様の世界も今日で終わりだッ！ 僕が、僕たち人間が貴様を倒し平和な世界を手に入れる！」

*

「これで終わりだ！ 魔王！」

「キサマツ……！ グフツ……」

声にならない叫びをあげ、魔王が倒れた。と同時に、嘘のような静寂が訪れる。魔王が放った熱気を帯びた魔法の効果は薄れ、風の音が聞こえた。

僕は剣を振り血を払った。

臭い。

鼻につくにおいに顔を掠めた。今の状況を一言で言うならば、それに尽きるだろう。生暖かい空気が肌に触れ、同時に胃液を逆流させようとする匂いを連れてくる。

「……人間の勝利だ。魔王」

「……」
魔王は何も言わない。いや、もはやそれは魔王と呼べるものではなくなっていた。

一言で言えば、ただの肉。赤と言うよりは黒に近いそれを辺りにまき散らした元魔王の物体に、黙って僕は近づいた。

あつけないものだ。永遠とも取れる長い年月をかけて僕たちを苦しめ続けた魔王は、一日にも満たない短い期間の死闘で死んだ。僕に、人間の手で滅ぼされた。

「……っ」

彼との戦いで負った傷がひどく傷む。

腕についた多くの小さな傷たちが、魔王の放つ紅い炎によって焼かれた皮膚の表面が、そして。

空気を斬り裂きながら飛翔した魔王の足掻きの一撃、それによって斬り裂かれた僕の片翼が。

今の僕の背には、バランスの悪い片方だけの翼がある。もう、二度と飛ぶことはできないのだろうか。

それでいい。

勇者としての役目は終わった。魔王を倒すことで、すべての人間に無償の愛を注ぐことができた。

思わず顔がほころぶ。僕の笑顔は、周りの惨状とは不釣り合いなほどに輝いているに違いない。

「……帰ろう」

僕はゆっくりと足を動かした。僕を待つ人達の元へと向かって。

【2】プロローグ - ?

「……その者が魔王だ。捕えよ」

「なっ、何を言うんですか！ 王様！」

暖かい歓声などではなく、どこまでも冷淡な声。魔王との死闘を終え、国にたどり着いた僕にかけられた言葉はそんな予想だにしない物だった。

僕が魔王？ 人間の為に人生の全てを魔王討伐にささげたこの僕が……？

王様はきつと冗談を言ったんだ。魔王を倒した僕を笑わせようと、そんな趣味の悪いジョークを言ったんだ。

「冗談はやめてください、王様。魔王は僕がこの手で倒しました。現に、統率のとれていた魔物たちの動きもぎこちなく……」

サクツ。

切れ味のいい音が耳元を突き抜け、僕の言葉を遮った。それと同時に冷たい感触が頬を伝う。手でそれを拭くと、僕の右手は赤い血で染まった。

王の隣にいた一人の兵士が投げた短剣は驚くほどの正確さで僕の頬を斬り裂き、小さな音を立てながら床へ落ちたようだ。その事実を痛みを伴うまで気づかなかった僕は、この状況についてよほど狼狽していたらしい。

「……っ！ 王様！ いかにも貴方様相手といえど、危害を加えられて黙っているわけには……！」

「黙らぬか！」

僕の言葉はもう一度遮られ、叫んだ王様が立ち上がった。

その顔に浮かべていたのは笑み。しかしそれは、純粋な子供が浮かべるような物とは程遠く、例えるなら……そう例えるなら、僕が

この手で滅ぼした“魔王”と呼ばれるものが浮かべていた物に、ひどく酷似していた。

この世全ての闇を一心に受けたようなそれは、威圧感と共に妙な不気味さを相手に与える。

くそっ！ 僕は正しいはずなのに！ なんだよこれ……！

どこで間違った、いや、もしかしたら最初から間違っていた？

答えの出ない自問自答を繰り返す僕をよそに、尚も王様は言葉を続ける。

「絶対的な魔王を倒したお前は、確実に人知を超えた存在である”。そんな魔物よりも危ないお前が、自然と人間の世界に溶け込めるとでも思っていたのか？ 戯けがッ！」

王様の鋭い眼光がこちらをにらんだ。思わず一步後ろに下がる。

「……！ それは違っ……！」
ッ。

そこまで言っつて、僕は自分自身で言葉を紡ぐのをやめた。止めざるを、得なかった。

震えていたのだ。

王様も、その周りの兵士も。この場にいた僕という“異常”を除いたすべての人々が、僕と言う存在に対して震えていた。

「……」

その姿を僕は見たことがある。魔王を倒すという名目で始めた旅の途中で、立ち寄った数々の村や国。

ある一つの村に、泣きじゃくる子供の姿があった。どうしたのかと尋ねた僕に、子供は魔物に両親を殺されたのだと言った。同時に、殺したいほどに憎いのに、恐くて怖くて仕方がないんだと、僕に打ち明けてくれた。

そんな人たちを責めることなんか、できるはずがない。

消してあげたかったその不安の元凶に、今度は僕がなっている？ ふざけている、馬鹿げている。この世の悪は確かに去った、まだ辺りをうろつく魔物も無意味に人を襲う事は少なくなるだろう。そう、確かにそうなのに……！

「くそっ……！」

僕は逃げた。

今まで一度だって使ってこなかった“逃げる”というコマンドをはじめで使用した。それは数ドットの許容範囲をはるかに超えるような大それた出来事で。僕には戦うなんてコマンド、選ぶことはできなかった。

今まで守ってきた人たちを、僕の理想郷を、壊すなんてできなかったのだ。

*

めったに人が立ち寄らない暗い路地裏。勇者と呼ばれていた頃は絶対に立ち寄らないだろうと思っていた場所に、僕はいた。

“勇者を見つけた者は直ちに王宮へ連絡せよ”

幾重の人の手に渡ったであろう汚い紙に書かれた文字を読み、僕は一度ため息をついた。

……もう、僕はここにはいられない。僕は勇者じゃなくて、魔王なんだ。

ゆっくりと立ち上がる。行く当てなど、ない。いや、当てだけじ

やない、僕にはもう何もなかったのだ。希望も生きる気力も人望も仲間も……。そして、自慢だった純白の両翼も。

死のう。もう十分に役目は果たした。これで僕が死ねば、本当にみんなは救われるんだ。

腰にある、幾度も魔物達を殺めてきた片手剣を抜き、僕はそれを首筋に当て。

「助けてえッ！」

！

急いで立ち上がる、同時に片手剣を構えなおした。勇者であった時の癖だ、人の悲鳴を聞くとどうしても構えを解くことができない。

今の声は、国の外から？ 早く助けに行かないと……。いや。

僕が助けに行っていないんだろうか？ 僕は魔王なんだ、人々から恐れられている邪悪な……。

そんな愚鈍な想像が脳内を支配したが、すぐさま首を横に振る。僕は迷わず駆けだした。

声の主を救いたかったから、などという立派な理由はない。ただ、その声を聞いた時、助けなければいけないと思ったときに僕はほんの少しだけ、このどうしようもない力の使う先を見つけたのだ。逃げる為にしかなかったこの力を、役立てる先を見つけたのだ。

勇者として通報されてもいい、魔王と罵られてもいい！ ただ、僕は……！

みんなの笑顔が見たいんだけなんだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1451ba/>

片翼の勇者と非道のカルマ

2012年1月4日01時50分発行